

---

# 舐め終わってから

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

舐め終わってから

### 【Nコード】

N6981S

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

裕美子は食後のデザートに飴を舐めた。だが母がそこで彼女にcandystore企画作品です。今回はゆるやかコメディーです。

舐め終わってから

池上裕美子は晩御飯を食べ終わりだ。

食後のデザートにあるものを取り出した。それは何かというた。キャンディだ。それを取り出し袋から出して口の中に入れたのである。

口の中に入れると舐めはじめる。その甘さが口の中全体を支配する。味はミルク味だ。その優しい甘さが裕美子にとってはこのうえなく美味なものであった。食後のデザートと言っていていいかわからない位ささやかなものであるがそれでもだ。その甘さは彼女にとっては最高のデザートであったのだ。

しかしだ。舐めているとだ。その彼女にそれまで一緒に食べていた母親がこう言ってきたのである。

「食べ終わったら後片付けしなさい」

「あつ、うん」

裕美子は母の言葉に頷いてすぐに席を立つてだ。そのうえで食器をなおしはじめた。食器洗い器の中に入れて一気に洗う。その方が水道代や洗剤を使わなくて済むので経済的だ。母も喜んでいる。食器を全て食器洗い器の中に入れてまたキャンディをゆっくりと味わえると思った。しかしである。

母は今度はだ。裕美子に対してこんなことを言ってきたのである。

「ちょっと牛乳瓶外に出してきて」

「牛乳瓶って？」

「だから牛乳瓶よ」

こう彼女に言うのである。

「それ出してきて」

「うっん、私今舐めてるのに」

「舐めながらも動けるじゃない」

この場合は母の方が正論である。まさにその通りであつた。

「だからよ。いいわね」

「仕方ないなあ。それじゃあ」

こうしてだ。裕美子は再び席を立ちそうして牛乳瓶を家の牛乳瓶入れ、いつも牛乳屋さんそこから牛乳を貰い牛乳瓶を手渡す場所に置いておいた。それが終わってからまた家に帰つたのである。これでやつと飴をゆっくり舐められると喜んでだ。ところがなのであつた。

母はまたしても言つてきた。今回は何かというのだ。

「御風呂入りなさい」

「御風呂つて」

「それか歯を磨きなさい」

こう言つのである。どちらかにしろというのだ。

「いいわね。すぐにね」

「まだ飴舐めてるのに」

それはまだ口の中に残っている。思ったよりも減っていない。彼女にとって母の今の言葉はだ。迷惑以外の何者でもなかった。

「それでそんなこと言つての？」

「舐めながら御風呂入られるでしょ」

「嫌よ、そんなの」

それはだ。顔を顰めさせて断る裕美子だった。

「何か食べながら御風呂に入るなんて」

「あんたそういうのは嫌いなね」

「正直言つて好きじゃないわ」

本音をだ。母親にありのまま話した。

「だから、それは」

「じゃあ歯磨きなさい」

「余計に無理じゃない」

さつきよりさらに顔を顰めさせての反論だった。

「飴舐めて歯磨きつて。どうやってするのよ」

「とにかくどつちかにしなさい」

あくまでこう言って引かない母だった。この辺り実に強い。やはり母は強しである。

「いいわね」

「ちえっ、じゃあどうしろっていのよ」

「どつちかにしなさい」

飴を舐めながら反論する娘への反論への反論だった。

「どつちかにね」

「どつちかにつて」

「それでどうするのよ」

母の問いはこれまでに以上に決断を迫るものだった。かなり強い口調になっている。

「あんだ。どうするのよ」

「うっん、そうね」

まだ飴を舐めている。それは終わりそうにない。裕美子は進退窮まった。

風呂か歯磨きか、それが問題だった。とりあえず飴を舐め続けることは許されそうにもなかった。それで遂に進退窮まったのである。果たしてどちらにすべきか、まだ風呂の方が飴を舐め続けられるのではないか、ふとこう考えた。そしてそう考えるとであった。

彼女はそちらに傾いた。そうしてだ。

母に対してだ。こう言うのであった。

「わかったわ。じゃあね」

「どつちにするの？」

「ここは」

言おうとした。しかしであった。

そこで飴がだ。舐め続けていてかなり小さくなってしまった、先程よりもさらに小さくなってしまったそれがだ。喉の中に落ちてしまったのだった。

そうなってしまった。裕美子はだ。

拍子抜けした声でだ。母にこう言った。

「今ね」

「今？どうしたの？」

「飴玉飲み込んだじゃった」

こう言ったのである。確かに飲み込んだ形になる。

「どうしよう」

「どうしようって。飲んだのよね」

「うん、飲んじゃった」

「じゃあどっちにするの？」

母親はそれならばだとだ。裕美子に対して問うてきた。拍子抜けした感じの娘の言葉とはだ。全く違っていた。

「ええと、とりあえずお風呂かな」

「お風呂にするのね」

「飴。なくなつたから」

それでだというのだ。その懸念材料となつてしまっている飴がなくなつてしまえばだ。彼女にしてもだった。

どちらかを選ぶしかない。そうしてであった。

彼女はお風呂を選んだ。そのうえでお風呂場に向かいまずは服を脱ぐのだった。

その服を脱ぎながら。考えることといえば。

「お風呂からあがったら。今度はメロンのにしようかな」

お風呂からあがっても飴を舐めようと考えていたのだ。それから歯を磨こうと思っていた。何につけてもだ。彼女はまず飴ありきりだった。そんな女の子だったのである。

舐め終わってから      完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6981s/>

---

舐め終わってから

2011年4月24日00時55分発行